

# 加藤斌と『商家必用』

渡 辺 和 夫

## 目 次

- 1 はじめに
- 2 加藤斌の経歴
- 3 『商家必用』の原書
- 4 加藤斌による翻訳
- 5 『商家必用』の意義
- 6 むすび

## 1 はじめに

『商家必用』は加藤斌の訳した簿記書である。明治6年10月および同10年4月に出版された。わが国で西洋式簿記書が最初に出版されたのは明治6年である。『商家必用』は同年に出版された2番目の簿記書になる。1番目は福沢諭吉の『帳合之法』であり、3番目はアラン・シャンドの『銀行簿記精法』になる。

『商家必用』は他の2冊と比較してあまり知られていない。その原因は2つあると思われる。ひとつは書名にある。書名からはおそらく簿記書と見なされないにちがいない。いまひとつは訳者の知名度にある。加藤斌は幕末維新に活躍した人物というわけではない。その影響があると思われる。

本稿の目的は、加藤斌訳『商家必用』を原書と比較しながら検討し、その意義を明らかにすることにある。

## 2 加藤斌の経歴

加藤斌の知名度が低い点は辞典を調べて見れば明らかになる。吉川弘文館発行の『明治維新人名辞典』には名前が載っていない。同館発行の『国史大辞典』になると、橋本左内との関連で索引にただひとつ採られている。同文館発行の『会計学大辞典（第五版）』においても名前は見出せない。それだけ経歴を明らかにすることは容易でない。

西川孝治郎氏によれば、加藤斌は1844年4月17日に生まれ、1914年9月4日に亡くなっている<sup>1)</sup>。明治6年（1873年）に『商家必用』を出版したときは30歳であった。加藤斌は福井藩士であったことから、藩主の松平慶永（春嶽）（1828-1890）および恩師の橋本左内（景岳）（1834-1859）との関係は緊密であった。

『商家必用』には松平春嶽、水野行敏および小田切盛徳の3人の序文が掲載されている。春嶽の序文には明治6年6月10日の日付が記載されており、その時点で訳はほぼ完了していたと思われる。同序文では、西洋の記簿法が商家にとって必用であるだけでなく、国家の利益にもなることが説かれている<sup>2)</sup>。簿記ではなく記簿という表現が用いられている点は注目すべきであろう。簿記という用語が当初から定着していたわけではないことを意味する。

橋本左内は春嶽の創設した藩校明道館の改革に尽力したひとりとされている。また、將軍継嗣問題ではともに積極的に行動した間柄であった。春嶽は左内の才能を高く評価し、ブレンとして活用したことになる。13代將軍家定の後継者については、一橋派が評判の高い一橋慶喜を推したのに対し、紀伊派は血統を重視して紀州藩主慶福を擁して対立した。しかし、春嶽等の一橋派が敗れ、左内は26歳の若さでこの世を去らねばならなかった。安政の大獄による犠牲になったわけである。

左内と加藤の師弟関係は短かったけれども密度の濃いものであった。加藤の

---

1) 西川孝治郎著『文献解題 日本簿記学生成史』雄松堂、昭和57年、35頁。

2) 同書、40頁。

名前「斌（なかば）」は左内の命名による。「文武相半ばす」に由来するといわれている<sup>3)</sup>。もともと、「あきら」と称する者もいる<sup>4)</sup>。左内は15歳のときに自省のために書いた『啓発録』を浄写して末弟の綱常と溝口辰五郎（加藤斌）に与えて「啓発」をうながしたといわれている<sup>5)</sup>。明道館では「文武不岐」が強調されていた<sup>6)</sup>。学問と武芸の双方を重視する左内の考えは加藤の名前に具体化されたといってもよいかもしれない。安政4年8月、藩主から呼び出された左内は、5人の学生を率いて江戸に向かった。そのうちのひとりが加藤であり、当時14歳であった。当時を回想して、加藤はつぎのように述べている。

「其頃私の習ったのは重に洋学、つまり蘭学で、始終先生の講義を聞いて居た、本はヘンチーアンチーと云ふ窮理書であった<sup>7)</sup>」

窮理書とは物理書を意味する。その後、蘭学から英学に移り、簿記書に関心をもつに至ったことになる。

### 3 『商家必用』の原書

『商家必用』は William Inglis の簿記書（1872年版）を訳したものであり、1881年版の復刻版ではつぎのような書名になっている。

Book-Keeping by Single and Double Entry with an Appendix containing Explanations of Mercantile Terms and Transaction, Questions in Book-Keeping, etc.<sup>8)</sup>

内容は、定義（7頁）、単式簿記（73頁）、複式簿記（100頁）および付録（23頁）から成っている。単式簿記と複式簿記の割合はほぼ等しい。簿記書とはい

---

3) 同書、45頁。

4) 川端太平著『松平春嶽（新装版）』吉川弘文館、平成2年、102頁。

5) 佐藤昌介・植手通有・山口宗之校注『渡辺華山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内』（日本思想大系第55巻）岩波書店、昭和46年、524頁。

6) 山口宗之著『橋本左内（新装版）』吉川弘文館、昭和60年、63頁。

7) 加藤斌「橋本左内先生」『日本及日本人』第496号、明治41年11月1日、17頁。

8) W. Inglis, Book-Keeping by Single and Double Entry..., W.& R. Chambers, 1881. (復刻版, 洋学堂書店, 平成11年)。

え解説部分よりも具体的な記帳例が大半をしめている。

冒頭において、簿記はつぎのように規定されている。

Book-Keeping is the art of recording and classifying a merchant's or tradesman's daily transactions, and of keeping an account of his Property and Debts, in a set of Books.<sup>9)</sup>

加藤の訳ではつぎのようになっている。

「此書ハ日々ノ諸算用ヲ認メ其區別ヲ分チ出入ノ勘定ヲ一組ノ帳面ニテ取結フ方法ナリ<sup>10)</sup>」

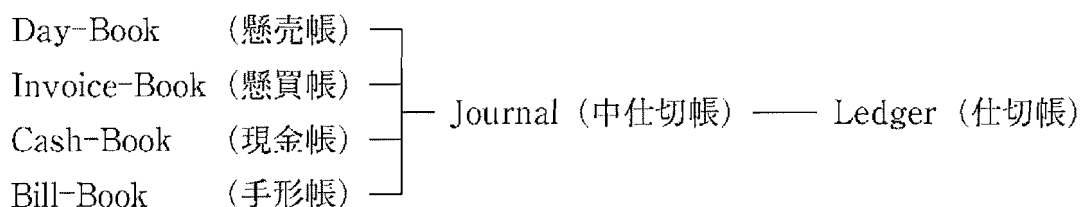
また、複式簿記の特徴について、原書はつぎのように説明する。

Book-Keeping by Double Entry is so called because all the entries in the Day-Book, Invoice-Book, Cash-Book, and Bill-Book are posted twice into the Ledger.<sup>11)</sup>

加藤訳ではつぎのようになっている。

「帳合ノ複認ト名付ケタル由縁ハ都テ懸売帳懸買帳現金帳手形帳ノ書留ヲ仕切帳ノ中へ二重ニ認入ルレハナリ<sup>12)</sup>」

すなわち、4帳簿から元帳（仕切帳—加藤訳）へ二度転記する点が複式簿記の特徴とされている。その際、単式簿記では使われない仕訳帳（中仕切帳—加藤訳）が利用される。したがって、イングリシ簿記書における複式簿記の帳簿組織は、つぎのように図示される。



\*（ ）内は加藤訳を示す。

9) Ibid., p.5.

10) W・イングリシ著、加藤斌訳『商家必用』（復刻版）雄松堂、昭和54年、初篇上、3葉表。

11) W. Inglis, Book-Keeping by Single and Double Entry..., op. cit., p. 85.

12) W・イングリシ著、加藤斌訳『商家必用』、前掲書、二篇上、1葉表。

元帳の諸勘定はつぎの3勘定に分類される<sup>13)</sup>。

Personal Accounts (人名勘定；人別勘定—加藤訳)

Property Accounts (財産勘定；物類勘定—加藤訳)

Profit and Loss Accounts (損益勘定)

これらの元帳勘定に関する決算手続きの概要はつぎのようになる。

まず、元帳の各勘定の残高がそれぞれ計算される。人名勘定に属する諸勘定は貸借差額を計算すればよい。財産勘定に属する諸勘定のうち商品勘定については、期末棚卸高を借方に記入し、差額の販売益が損益勘定に振り替えられる。損益勘定に属する諸勘定については損益勘定に集計され、純損益が計算される。純損益は資本金勘定に振り替えられる。

次期への繰越は残高勘定を通じて行われる。なお、「イングリスの簿記書では、独立した会計報告書としての Balance Sheet が、残高勘定から独立して別に作られている。<sup>14)</sup>」

財産勘定のうち建物や機械などのいわゆる固定資産については、取得原価の5または10パーセントの減価償却が考慮されている<sup>15)</sup>。この処理は減価償却に関する初期の一例として、リトルトンの『会計発達史』では1861年版から紹介されている<sup>16)</sup>。

#### 4 加藤斌による翻訳

『商家必用』は明治6年10月と同10年4月に分けて出版された。6年10月には初篇上・下の2冊が刊行された。それらはいずれも単式簿記の部分になる。

---

13) W. Inglis, *Book-Keeping by Single and Double Entry*..., op. cit., p.101.

14) 久野秀男著『英米(加)古典簿記書の発展史的研究』第一法規出版, 昭和54年, 289頁。

15) W. Inglis, *Book-Keeping by Single and Double Entry*..., op. cit., p. 102.

16) A. C. Littleton, *Accounting Evolution to 1900*, Russell & Russell, 1933, p.226. 片野一郎訳『リトルトン会計発達史(増補版)』同文館, 昭和53年, 332頁。なお、原書と訳書の両方とも Inglis ではなく English になっている。

10年4月には二篇上・下および付録の3冊が刊行された。付録を別にして、それらは複式簿記の部分に相当する。単式簿記を刊行してから複式簿記を出版するまでに3年半を要している。全体を一気に訳したのではなさそうである。

西川孝治郎氏は、訳者の令嗣からの直話として、つぎのように述べている。

「訳者加藤は若年から橋本左内の薫陶を受け、深く開国進取の精神に感化された。また書物を通じて西洋の新事実を知り、産業貿易のことに理解をもつに至ってのち、横浜に出て親しく外人に接し、貿易市場の空気に触れてさらに大いに啓発せられ、彼の長所を採りわが国益を計ろうと志を固めた。工部省勤務の余暇を割いてイギリス簿記書を翻訳し、私費を投じて『商家必用』を出版したのはこの信念に基づくものである。<sup>17)</sup>」

また同氏は、つぎのようなコメントを加えている。

「工部省には早くから鉄道・造船・鋳山など外人技師とアツカウナントがいて簿記を実施していたので、その刺激も小さくはないと私は思った。<sup>18)</sup>」

加藤がイングリシの簿記書を翻訳した経緯がおおよそ推測できるかと思われる。また、加藤は簿記書とまったく異なる分野にも関心を示していた。それは『独逸海上保険法』であり、明治12年に翻訳出版されている。閱者田口憲氏によれば、「英人奄徳氏カ摘訳シタル海商事ノ保険部ヲ重子テ摘訳スルモノ<sup>19)</sup>」であり、それは英語からの重訳であった。

加藤は単式簿記を「単認（ひとえどめ）」と訳し、複式簿記を「複認（かさねどめ）」と訳した。その他にも独特な訳語がいくつか使われている。それらのうち主なものをまとめると表1のようになる。いかに翻訳に苦心したかがわかると思われる。なお、片岡泰彦氏は福沢諭吉の訳語と加藤斌の訳語を比較対照して詳しく示している<sup>20)</sup>。

---

17) 西川孝治郎、前掲書、40頁。

18) 同書、40頁。

19) 加藤斌訳『独逸海上保険法』明治12年、例言、1頁。

20) 片岡泰彦著『複式簿記發達史論』大東文化大学経営研究所、平成19年、376-377頁。

表1 加藤斌の訳と現在の訳

1881年版の原語	加藤の訳	現在の訳
Day-Book	懸売帳	掛売帳 (注)
Invoice-Book	懸買帳	掛買帳 (注)
Journal	中仕切帳	仕訳帳
Posting	認入	転記
Ledger	仕切帳	元帳
Trial Balance	仮差引表	試算表
Balance Sheet	差引表 (差引見認表)	貸借対照表

(注) 今日では Day-Book を日記帳, Invoice-Book を送り状帳と訳されるであろう。しかし, 原書では掛売帳と掛買帳の意味で使われている。

## 5 『商家必用』の意義

イングリスの原書では単式簿記と複式簿記がほぼ半分ずつ扱われていた。単式簿記に対する見方は今日より重視されていたようである。複式簿記の方がすぐれた記帳システムであることは間違いないにしても、単式簿記にもそれなりの有用性を認めていた。どちらを選択するかは企業の状況によって異なることになる。

『商家必用』は明治6年に単式簿記の部分だけが刊行された。単式簿記といっても、重要性が低いというわけではない。西洋式簿記に注目したこと自体がきわめて重要であった。参考にすべき文献がなにもない時代に苦心して翻訳したことは高く評価されてよいであろう。明治6年に単式簿記部分を出版した意義は、西洋式簿記の重要性を認識した点にあったといえよう。

原書の記帳システムは必ずしも単純とはいえなかった。はじめて簿記を学ぶ者にとってはかなり高度な内容といえよう。単式簿記から複式簿記へと進む学習体系が採られているため、両者には多くの共通点が見出される。とりわけ4帳簿を出発点とする記帳システムは特色といえよう。途中で仕訳帳が介在する

か否かの違いがあるにしても、貸借対照表が作成されるまでの過程は共通している。共通させることにより複式簿記への移行がスムーズになるにしても、それだけ単式簿記の方は複雑にならざるをえない。西洋式簿記を学ぼうとて、原書および訳書の内容は必ずしも理解しやすいものとはいえない。

福沢諭吉の『帳合之法』と加藤斌の『商家必用』の内容的な違いについて、片岡泰彦氏はつぎのように指摘している。

「『帳合之法』が、パチョーリに基礎を置く、純粋なイタリア式簿記法を解説したのに対し、『商家必用』はドイツ、フランス及びイギリスを中心に考えられた複雑な簿記法を解説したものである。<sup>21)</sup>」

西洋式簿記をわが国にはじめて導入する試みとしては、『商家必用』はやや高度であったといえよう。

原書と『商家必用』を読み比べてみると、原書の方がはるかにわかりやすい。西洋式簿記にわれわれが慣れていないせいであろう。かなり忠実な翻訳であるにもかかわらず、まったく異なる書物を読んでいる印象を与える。今日の一般的な用語とはかなり違う訳語が多く使われているため、概念を把握しにくくなっているせいもある。『商家必用』が当時の人びとにどれだけ理解されたかとなると、かなり懐疑的にならざるをえない。

## 6 む す び

『商家必用』は西洋式簿記をわが国に紹介した2番目の翻訳書であった。1番目の『帳合之法』から遅れることわずか3ヵ月である。2番目とはいえ苦心した程度は1番目と実質的に変わらないといってよいであろう。

現在、複式簿記は企業で当然のごとく普及している。しかし、明治6年という時代にはまだ理解されていなかった。当時の状況を想像することは容易でない。しかも、『商家必用』の場合、資料がきわめて乏しい。同年に出版された

---

21) 同書, 375頁。



他の2著と比較してきわめて地味な存在であった。それは一部の研究者にしか関心もたれていない。そのような状況のなかで、百数十年前に出版された本書を評価することは簡単でないといえよう。